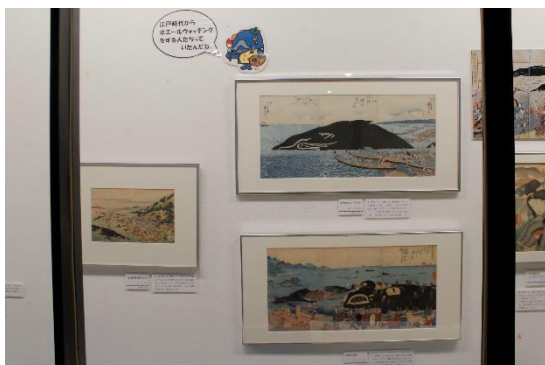


## 鳥羽市立海の博物館・白浜海洋美術館

### 特別展「クジラはアートだ！」

開催期間：海の博物館／2019年7月13日（土）～2019年11月17日（日）

白浜海洋美術館／2019年12月7日（土）～2020年3月22日（日）



#### 【企画展の内容・目的】

- 日本人の重要なタンパク源であったクジラの漁獲方法やその歴史などについて、実際に使用された道具類や絵図類を使い、可視的に実施した。
- クジラ関連の祭礼の分布マップ慰霊のための石碑が全国に多数分布し、今も残ることをパネルや拓本などにより知ること、古来人が海からの恵みを利用し、感謝と崇敬の念を持ち続けてきたこと実感してもらう機会とした。
- 歯、脂肪、ヒゲ、骨など肉以外の様々な部位を使った道具類・アート作品・信仰道具を多数展示し、貴重な水産資源を無駄なく利用することの重要性を学んでもらった。また食料や日用品の材料、願掛けの道具になるなど、海の生きものと人間の生活との多様な関わりが理解しやすくなった。
- 日用品の材料となった身体の部位、クジラをとる漁具などを実際触ることができるようにし、クジラや海への興味が喚起されやすくなった。
- 解説を聞く、クジラ料理を食べる、ものづくりをするなど多彩な付随事業によって、クジラの魅力や人との密接な関わりについて理解深め、海に親しむ心を育てる機会となった。

※上記写真等は特別な許可を得て撮影されたものです。無断転載等はできません。

# 1. 企画展示の内容

■開催期間：海の博物館／2019年7月13日(土)～2019年11月17日(日)

白浜海洋美術館／2019年12月7日(土)～2020年3月22日(日)

■開催場所：鳥羽市立海の博物館特別展示室・白浜海洋美術館常設展示室

■入場者数：13,498人



鳥羽市立海の博物館外観



白浜海洋美術館外観



鳥羽市立海の博物館展示室入口



白浜海洋美術館誘導表示



クジラをかたどった神輿（鳥羽市相差地区）



全国のクジラ供養塔マップ

※上記写真等は特別な許可を得て撮影されたものです。無断転載等はできません。

- ・伊勢湾から志摩半島、熊野灘沿岸で営まれていた捕鯨の歴史と、そこから派生した祭事について、古文書や漁具、祭礼用具を用いて紹介した。クジラが観音様を乗せて上陸したとの伝承に基づいた、鳥羽市相差地区の大きなクジラ型神輿や鈴鹿市長太地区の鯨船行事で使うクジラ張り子の実物を展示し、三重県沿岸で伝統的にクジラ漁が営まれ、海からの恩恵を多分に享受してきたこと、現代まで自然に感謝し続けていることを伝えた。
- ・床面に一般的なザトウクジラのサイズ（約15m）を表示し、クジラの雄大さを実感してもらうことにより、クジラの生態への興味を喚起した。
- ・全国のクジラ塚・供養碑を地図上で示したパネルと拓本、祭礼用具により、自然からの恩恵に感謝の念を忘れない、日本人らしい精神性を可視的に理解しやすくするとともに、多数の石碑、祭りに反映される日本人の生活とクジラとの密接で広域的な関係を知ってもらうことができた。



浮世絵・絵巻など多数の絵図を展示



絵図に出てくるクジラ鉾の重さを体験

- ・日本では浮世絵や捕鯨絵巻、そのほか日本画で全国各地の捕鯨の様子や、クジラを見物する群衆の賑わいなどが描かれており、それらの作品を数多く展示することで、クジラが地域の経済を支え、また大衆的な関心事であったことを実感してもらうことができた。
- ・海外も含めて企業広告用のポスターにも多数デザイン化されていることを紹介し、クジラが世界で幅広く親しまれる存在であることを伝えた。
- ・クジラを描いた作品では様々な種類のイルカやゴンドウ（小型のハクジラ）、大型のヒゲクジラ（セミクジラやザトウクジラ、マッコウクジラなど）がモチーフとなっており、クジラを通じて海の生きものの多様性を感じてもらうことができた。
- ・絵に表現されている生態（汐はなんのために吹くのか など）や、漁法（クジラ用のモリはなぜ上に向かって投げるのか など）などについて、オリジナルキャラクターが解説する形式でわかりやすいキャプションを付けた。これにより、絵画の芸術的な面を見るだけでなく、アートからクジラの生態や捕鯨の歴史に対する理解を深められるようにした。
- ・捕鯨が現在まで続く千葉県和田浦の小・中学生による絵画作品を展示し、海を通じた文化交流を実践した。多くの人が見る展示会場に作品が展示されることで、今後子どもたちが海の学びを継続、深めてゆく励みとすることができた。



各部位を使った漁具・生活道具・洗剤など



骨やヒゲ、ヒゲからできた靴べらなどに触る

※上記写真等は特別な許可を得て撮影されたものです。無断転載等はできません。

- ・クジラをモチーフにした世界中の立体造形の作品（民芸品、置き物、立体アートなど）から、クジラが広域的に、幅広い年代で注目を集めていることが実感できるようにした。
- ・ヒゲや歯、骨、皮、脂肪など身体の各部位を材料にした日用品・アート作品を見ることで、日本人が海からの恵みを大事にし、資源を無駄なく利用してきた歴史とその重要性を知ってもらうことができた。またクジラがタンパク源以外にも様々な形で人の生活の支えとなってきた歴史を実感することで、海に対する親近感を高め、今後も長く共生してゆくためには海の環境を守る必要があることを感じてもらえた。
- ・クジラと人の親密性（世界中でクジラをかたどった民芸品が制作されてきたこと、心臓の皮まで使ってきたこと など）を学ぶうえでポイントとなる箇所には、オリジナルキャラクターが解説する形式にてわかりやすいキャプションを付けた。
- ・様々な製品の材料となってきた身体の部位（骨・ヒゲ・歯）やヒゲからできた製品（靴べら）、海への崇敬のこころをあらわすネックレス（イルカの耳石を「布袋石」として海上安全の御守りとした）などを触ることができるようにし、水産資源の利用をはじめとした人と海との共生、双方をつなぐ信仰、クジラの生態などに対する興味をより喚起するようにした。



昭和前期には輸出品になったクジラのレトロ玩具



絵本・カルタ・紙芝居で楽しむコーナー

- ・全国各地のクジラをモチーフにした郷土玩具を一堂に展示し、捕鯨が行われていた沿海地域だけでなく、内陸部においても多数のクジラの郷土玩具が製造されていたことを実物により示し、クジラやそれを育む海が、日本全体でとても身近で親しまれた存在であることを知ってもらうことができた。
- ・郷土玩具は祭礼や漁業など制作された地域の習俗を反映していることも多く（和歌山県太地町のものは、祭礼で使用する道具をかたどっている、三重県四日市市のものは世界遺産になった鯨船行事の神輿をかたどっている など）、各地のクジラの利用、海への信仰についても、親しみやすい玩具資料を通じて学んでもらうことができた。
- ・クジラの生態や海的环境などについて学ぶことができるカルタを置き、小さな子どもでも実際に遊んで楽しみながら、小さな子どもでも海の学びを深化させられる場とした。
- ・絵本や紙芝居、教科書の一部を手にとって読めるようにした。子どもたち自身や一緒に読む大人にとって、普段何気なく読んでいるもののなかにも多くの海の学びがあることに気付く機会となるよう、絵本や教科書に海の民俗や生きものの生態、環境に関する学びのポイント例を示した（『山クジラ』という絵本には、むかし動物の肉を「山クジラ」と呼んで食べていたこと、クジラが様々なものを飲み込む場面にはヒゲクジラの食べ方の情報を付す）。これにより、学習を深化させるとともに、絵本などの教材などを使い、海の学びを普及できる人材の育成につながることが期待される。

※上記写真等は特別な許可を得て撮影されたものです。無断転載等はできません。

## 【来館者の声】

- わかりやすくするために文だけではなく絵も描かれていてよかったと思います。海は人間にも動物たちにとっても重要だということがよくわかりました。
- 芸術作品のモチーフとして多く用いられ、小さなおもちゃなどからも、漁民をはじめとした日本人にとって海はとても身近な存在なのだと感じました。
- クジラという生きものがむかしの人々には神秘的で、絵師さんによって多種多様な描かれ方をされていることが、とても興味深い感じがした
- 普段知ることの少ないクジラについて学び、海の保全活動などが進み、動物を保護することにつながればいいと思いました。
- この展示を見ると、日本人はクジラから恩恵をいただき、感謝を示し、大切にしてきた風に思えます。だからわたしたちの文化に誇りを持ち続けていいような気がしました。
- 昔は給食で食べていたクジラも今はすっかりいただくことはなくなりましたが、クジラと人の暮らしのつながりを思い出すきっかけになりました。保護するだけでなく文化も大切にしたいと思っています。
- クジラのヒゲや骨に触ることができてよかった。クジラを食べたい！と思った。クジラを見に行きたいとも思った。

## 2. 関連事業の内容

### ■シンポジウム「わたしがクジラを好きなワケ」

【開催日時】2019年8月4日（日）13:30～15:30

【開催場所】鳥羽市立海の博物館映像ホール

【参加者数】35人

【実施内容・目的】

- 異なる様々な立場（研究者・コレクター・アーティスト）の講師がクジラや海の魅力を語り、参加者が「調べる」「集める」「作る」など、今後自身に合った海の学び方を自主的に実践してもらおうきっかけづくりとし、海洋文化を普及する人材の育成につなげる。
- 話しを聞くだけでなく、身体の部位や実物の作品を触ることによって、クジラの生態や文化的な側面への興味が喚起されるようにした。
- アーティストによるワークショップを実施することによって、ものづくりを通じてクジラの形態的特徴や種の多様性などへの理解を深め、より海の生きものへの興味、親近感が喚起されるようにした。



会場の様子



ワークショップ用の準備

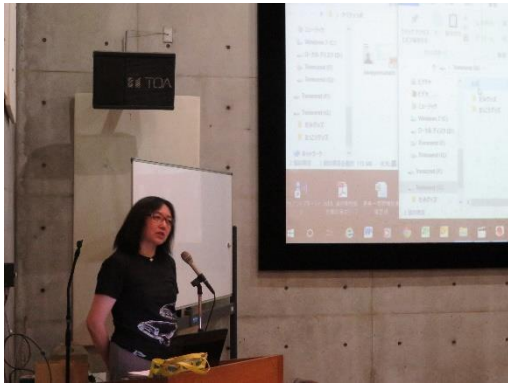


吉岡先生（三重大学）による生態お話



人形や実物の歯などを使ってわかりやすい解説

※上記写真等は特別な許可を得て撮影されたものです。無断転載等はできません。



くじらグッズ展示室の永田先生によるお話



様々な日用品にクジラのデザインがあふれる

- 参加者が自身に合った海との関わり、学び方を見つけやすくなるよう、多面的な立場からクジラや海の魅力を講師に語ってもらった。参加者が「調べる」「集める」「作る」など多様な海の学びを実践することにより、海洋文化への理解を深め、それを普及する人材の育成につながることを期待できる。
- クジラや海の生きものの専門家から、幼少期の体験談、現在の仕事を目指したきっかけなどを聞くことによって、子どもたちが今後自主的に海の学びを進め、深化してゆくうえでのヒントになると考えられる。
- 講師が話すだけではなく、クジラの部位やぬいぐるみ、クジラをかたどったグッズ、クジラをモチーフにした作品の実物を見て、適宜参加者が触るなどしながら講話を進めることによって、より興味が喚起されやすくなった。



山田勇魚先生によるワークショップ



希望者は博物館内にて作品を展示

- 一方的に話しを聞くだけでなく、シンポジウムの一部では、地元の海の砂を使い、全員で講師のアート作品をモチーフにしたものづくりに取り組んだ。様々なクジラの型紙から好きなものを選び、クジラのなかに絵をかくて、最後にクジラの下半分に海の砂を両面テープで貼って完成させた。小さな子どもたちでも体験できるワークショップで、楽しみながらクジラに親しんでもらうことができた。
- ワorkshopで制作した作品は一定期間館内にて展示し、来館者に見てもらえるようにした。自身の作品が博物館で展示されることによって、参加者の学習意欲が高まり、今後より海の学びを熱心に、自主的に深化させることが期待できる。
- 作品はすべて額装して返却した。部屋に飾り日常的に目にしてもらうことにより、海やクジラに親しむ心が育つと考えられる。

## 【来館者の声】

- 世界中にたくさんの種類のクジラがいることがわかりました。子どものころからよく絵本や図鑑でクジラを見てきましたが、意外と生態などについて知らないんだなと思いました。
- わたしもクジラのいろいろなグッズを集めてみたいです。クジラ型のやかんがあるのにも驚きました。
- お絵かきと砂をまいたのが楽しかった。このあたりの砂はすごいさらさらだった。博物館にかざってもらえてうれしい。家にもかざりたい。



## ■クジラの郷土玩具をつくろう！

【開催日時】 2019年7月28日（日） 13：00～14：30

2019年8月24日（土） 10：00～11：30・13：00～  
15：00 受付

【開催場所】 鳥羽市立海の博物館体験学習室

【参加者数】 13人

【実施内容・目的】

- 和歌山県太地町にある民芸工房 抱壺庵（ほうこあん）の協力を得て、クジラをかたどった風鈴と壁掛けを制作した。
- 捕鯨が盛んであった地域や内陸部でも盛んに制作されてきた、クジラをかたどった民芸品の制作体験をすることによって、日本人が広くクジラに関心、親しみを持ってきたことを実感してもらうことができた。
- 博物館の学芸員が、全国各地の郷土玩具の特徴とその違い、形状に反映される祭礼などについて解説し、人の生活や信仰とクジラとの関わりを学べるようにした。



学芸員からの解説



各地の郷土玩具について解説

まず学芸員から写真や実物を使いながら、全国の内陸部や都市部に至るまでクジラの民芸品・郷土玩具が伝統的につくられてきたこと、地域ごとに特徴的な作品があり、土地の祭りや伝承が形に反映していること、クジラの部位を無駄にせず、民芸品や日用道具の材料としても利用されてきたことなどを解説した。これにより、クジラが日本各地で広く親しまれた生きものであり、民俗、信仰などとも深く関わってきたことを伝えた。



熱心に壁掛けを制作



完成した風鈴と記念品の下敷き

自由な配色でクジラ型の風鈴と壁掛け（メッセージボード）の絵付け体験をした。家庭で使用し日常的に目にとまることによって、クジラ、海に対する親近感が高まることが期待できる。

参加の記念品として、日本近海にいるクジラの種類・大きさ、クジラの各部位の利用方法、肉の栄養についてわかりやすく図示した下敷き（日本鯨類研究所提供）を配布した。クジラについて興味を持つきっかけづくりをするとともに、海洋資源の無駄のない利用、クジラの資源的価値、生態の多様性などについて理解を深めてもらうことができた。

### 【来館者の声】

- クジラの風鈴など普段色を塗ったりすることがないので、とても楽しかったです。クジラは肉も骨も全部使ってすごいなと思いました。親しみが持てました。
- クジラが好きに塗れて楽しかった。クジラは種類がたくさんいることがわかった。
- 海女の動画とクジラについての展示がよかった。海を大切に、自分たちにできることからしてゆきたいと思いました。

## ■食卓にいつもクジラを クジラの絵皿をつくろう！

【開催日時】2020年3月8日（日）13：30～16：00

【開催場所】白浜海洋美術館

【参加者数】10人

【実施内容・目的】

- プロの陶芸家の指導により、クジラをかたどった皿を自由に制作した。作品は後日焼成し、参加者に送付する。
- 制作体験をしながら、房総半島の捕鯨の歴史や様々なクジラの形状の違いなどについて講師が話すことによって、楽しみながら海の生きものの生態や、海と人との継続的な関わりにも興味が喚起されるようにした。
- 日常的にクジラをかたどった食器を使うことによって、クジラや海に対する親近感を高めることが期待できる。



イルカやツチクジラなど様々なクジラの作品



講師のお話を聞きながらの制作体験

自身の手でクジラの形の作品を作り出すことによって、クジラや海に対する親近感を高めてもらうことができた。また普段からクジラ型の食器を使うとことによって、海を身近に感じるきっかけとなる。

作品をつくりながら、講師が房総半島の捕鯨の歴史や様々なクジラの種類（ヒゲクジラとハクジラがある、房総では現在もツチクジラやイルカを中心に捕鯨が続き地域の象徴になっているほか）などについて解説することにより、クジラの多様な生態や、地域に根差した海の文化に対する理解が深まった。

### 【来館者の声】

- いろんなクジラがつくれて楽しかった。はやく家で使いたい。
- 陶芸は初めてでしたが講師の先生にやさしく教えていただき、また南房総の捕鯨の話や万祝の話も興味深かったです。
- イルカもクジラの仲間のこと、ツチクジラというクジラがいることがわかった。

※上記写真等は特別な許可を得て撮影されたものです。無断転載等はできません。

## ■ミュージアムガイドとクジラつまみ食い

【開催日時】海の博物館／2019年7月14日(日)・9月23日(月・祝)  
11:00~11:30

白浜海洋美術館／2020年1月12日(日)  
11:00~11:30

【開催場所】鳥羽市立海の博物館映像ホール・特別展示室、白浜海洋美術館  
常設展示室

【参加者数】42人

【実施内容・目的】

- 担当者が画像や映像を使いながらわかりやすく解説することにより、捕鯨文化や海洋資源としての無駄のない利用、信仰との関わりなど、展示内容をより総合的に、深く理解してもらう。
- 展示の見学だけでなく、クジラの竜田揚げやクジラのタレ（干物）などを試食することにより、伝統的な海の食文化を体験する。



展示見学前にポイントを予習（海の博物館）



画像を使って古今東西のクジラアートを紹介（海の博物館）

海の博物館でのギャラリートークでは、展示見学へ移る前に、映像ホールにて何千年も前から作成されてきたクジラのアート作品の実例や、クジラの遊泳する映像、各地の祭礼など、見学を通じて海の学びを深めるうえでのポイントとなる点を解説した。

事前に画像や映像を使って予備知識を得てもらうことによって、ながきに渡りクジラや海が多くの人の関心、憧憬、信仰を集めてきたことが理解しやすくなるようにした。



クジラの浮世絵について解説（海の博物館）



貴重な祭具に興味津々

※上記写真等は特別な許可を得て撮影されたものです。無断転載等はいけません。



学芸員による解説（白浜海洋美術館）



名誉館長による万祝の解説（白浜海洋美術館）

多数のアート作品・民芸品を見学しながら、作品の芸術的な面だけでなく、図柄や形状から読み取ることができるクジラの生態（なぜ汐を吹くのか など）、民俗（漁法の特徴や資源としての利用、作品によっては国際情勢を風刺している など）に注目して解説することによって、クジラの生態的な面白さや、雄大な捕鯨の習俗、暮らしのなかでの利用など日本に根付いたクジラ文化を総合的に理解できるようにした。

途中、マッコウクジラの歯に触れてもらい、大きさや重さ、質感を知ることによって、クジラの（特にヒゲクジラの仲間やマッコウクジラ）雄大さや生態、資源としての各部位の利用に対して、興味がより喚起されるようにした。

白浜海洋美術館では、漁の大漁を祝い、翌年の海上安全を祈って作られる着物“万祝（まいわい）”を多数所蔵しており、試着をしてもらうことで海にまつわる信仰や、クジラ漁によるかつての漁村の賑い、捕鯨の経済的な役割の大きさを実感してもらうことができた。



ベーコン・竜田揚げの試食（海の博物館）



クジラのたれの試食（白浜海洋美術館）

話を聞くだけでなく、クジラ料理を試食し、食材としての魅力を知ってもらうことにより、今後の利用拡大、伝統的な海の食文化の継承につながることを期待される。

クジラのたれ（干物）は房総半島の伝統料理であり、これを食して実体験することによって、地域の食文化、クジラや海と住民との伝統的なつながりについて理解が深まった。

### 【来館者の声】

- クジラの歯にさわることができてよかった。すごく大きかった。
- クジラの絵、江戸時代に描かれたものがよかった。むかしから海は豊かで、人にとって有益であり、共生してゆきたい。
- クジラのたれ、お刺身は懐かしい思いです。日本の昔の、生活のなかにあった美しいものを守って、伝えてゆくことの大切さや意義深さについて改めて意識しました。

※上記写真等は特別な許可を得て撮影されたものです。無断転載等はできません。

## ■料理教室「日本の食文化・クジラをおいしく料理する」

【開催日時】2019年9月7日（土） 11:00~14:00

【開催場所】鳥羽市立海の博物館体験学習室

【参加者数】30人

【実施内容・目的】

- クジラを食べる文化は日本古来のものだが、近年その消費量は減少し、臭いや固さなど肉にクセが強く苦手だというイメージも根強い。クジラ食の普及や消費拡大、海の資源利用に対する理解の深化に寄与するため、正しい下処理の方法、おいしい調理方法をプロから学ぶ料理教室を実施した。
- 日本の捕鯨に長く携わってきた日本捕鯨協会から、クジラの栄養や捕鯨について話してもらうことで、食材としての魅力や捕鯨の歴史を伝え、クジラを通じ自身の暮らしと海との結びつきを意識しやすくした。



めったにみられないクジラ肉のかたまり



クジラ肉の栄養や各部位の利用など解説

最初に、日本の調査捕鯨等に長年関わってきた日本捕鯨協会の職員から、クジラ肉の優れた栄養や各部位の利用方法、捕鯨船内での加工の様子などについて、映像や画像、グラフなどをつかって解説をしていただいた。

一般的には目にすることのできない捕鯨船内の映像により、捕鯨に対する興味を喚起するとともに、栄養源として、また無駄なく利用できる海洋資源としてのクジラの優れた性質を伝えることができた。



はじめて見るクジラ肉に興味津々の参加者



臭みが出にくい調理のコツを伝授

※上記写真等は特別な許可を得て撮影されたものです。無断転載等はできません。

火を通し過ぎることで臭いがなかにこもってしまう、大量にドリップが出るので購入後は素早く調理するなど、固さや臭いが気になるといったイメージの強いクジラ肉をおいしく調理するコツを伝授することにより、今後のクジラ肉の消費拡大、伝統的な食文化の継承に寄与する事業となった。



完成した料理の試食



刺身



おでん



ハリハリ鍋

メニューは刺身、おでん、ハリハリ鍋、大和煮を作った。

捕鯨に長く携わっている捕鯨協会を通じて材料を調達することにより、非常に質の良いクジラ肉を利用することができた。参加者の評判も非常によく、本事業にて利用したような材料の手軽な購入方法も説明することによって、日常での自主的なクジラの調理を促し、今後のクジラ肉に消費拡大、海の食文化の継承が期待できる。

参加者にはクジラのヒゲ（日本捕鯨協会提供）、日本近海のクジラの種類、各部位の利用方法、栄養を図示した下敷きをプレゼントした。ヒゲの大きさや固さなどからクジラの生態に対する興味を喚起するとともに、海洋資源の無駄のない利用、クジラの資源的価値、生態の多様性などについて理解を深めてもらうことができた。

### 【来館者の声】

- クジラ肉の料理がたくさん経験できてよかったです。このような文化を大切に守っていかねばと思いました。
- クジラ料理を初めて色々いただくことができおいしかったです。クジラの種類や捕鯨のことを学ぶことができました。
- とってから加工まで捕鯨船なかのビデオを見せてもらえてよかったです。たくさんある資源を大切にしないといけないと思います。自宅の目の前も太平洋なので、これからも美しい海を大切にしたいです。

※上記写真等は特別な許可を得て撮影されたものです。無断転載等はできません。

## ■講演「火縄銃でクジラがとれた？」

【開催日時】2019年9月15日（日） 13:00～15:00

【開催場所】鳥羽市立海の博物館映像ホール

【参加者数】29人

【実施内容・目的】

- 網とモリによる古式捕鯨から、洋式の捕鯨銃によるノルウェー式捕鯨へ転換してゆく過渡期については、これまであまり詳細が知られてこなかった。そこで砲術史研究の第一人者、澤田平さんを講師として、その時期に国内で開発が試みられた捕鯨用火縄銃に焦点をあてて講演していただくことにより、捕鯨の歴史をより深く学ぶ機会とする。
- 参加者が捕鯨用の火矢や銃身などを見て、実際に触れることによって、道具を工夫しクジラの捕獲に挑んできた先人の苦労や、日本人がクジラやそのほか海からの恵みにより生活を支えられてきたことを実感してもらおう。



砲術史研究の第一人者 澤田先生のお話



火縄銃の構造の基礎から丁寧な説明

火縄銃の仕組みの基礎からわかりやすく解説することによって、捕鯨用の火縄銃や海の歴史に対する興味・理解をより深化させることができた。

実物資料や模型、映像も用いながら話すことによって、可視的に話の内容を理解し、捕鯨の歴史に対する興味を喚起することができた。



捕鯨用の「棒火矢」を触る参加者



大筒の重さを体験

※上記写真等は特別な許可を得て撮影されたものです。無断転載等はいけません。



クジラをとるために開発されたと考えられる棒火矢（着弾すると火薬で対象にダメージを与えるモリ）や撃ち出すための大筒に参加者が触れてみることで、大きさや重さを実感し、それらで獲るクジラの雄大さを感じ取ってもらうことができた。

また道具に触れることにより、捕鯨のために先人が様々な工夫を重ねたこと、それだけクジラが地域の経済を支えるうえでも重要であり、海と人の暮らしが密接に関わっていたことを学んでもらうことができた。

### 【来館者の声】

- 先生のお話が楽しくユーモアをまじえながら、わかりやすくとてもよかった。普通の火縄銃との大きさの違いにびっくりした。
- クジラ用の火縄銃はやはり非常に重かった。大きなクジラをとるにはやはりこれくらいのものが必要なのだなと思った。
- 日本でもこのような捕鯨銃を開発していたことを初めて知った。日本人とクジラは関わりが深いことを実感した。

## ■あなたもクジラアーティスト

【開催日時】 2019年7月27日(土) 10:00~12:00、13:00~15:00

【開催場所】 鳥羽市立海の博物館体験学習室

【参加者数】 44人

【実施内容・目的】

- 和歌山県太地町を中心に活動するアート集団“Whale Art Museum”を講師に、樹脂でストラップづくり体験を実施した。クジラや海の生きものに親しみ、興味を持つきっかけになるよう、小さな子どもも気軽に参加し、身の回りで使うことのできるものづくり体験とした。
- つくって楽しみながら、クジラの形状や生態などについて解説し、海の生きものの多様性を理解しやすくする。
- 海の学びに関わるアーティストのPR・活動の場を提供し、今後自主的にも体験事業が実施されることで、より多くの人々が海に親しみ、学ぶ場が増えることが期待される。



いくつかの型から選んで制作



温めると柔らかくなる樹脂を使用

マッコウクジラ・ザトウクジラ・バントウイルカ・ハナゴンドウなど複数の種の型を用意し、参加者が形を比べたり、講師が解説することによって、海の生きものの多様性が理解しやすくなった。

小さな子どもでも体験できるものづくり教室にすることで、気軽に、楽しみながらクジラに興味を持ち、親しんでもらうことができた。



型でおして、はみ出した部分を丁寧にカット



かわいいクジラストラップの完成

※上記写真等は特別な許可を得て撮影されたものです。無断転載等はいけません。

今回は講師特製の型を使用したけど、代用の型やそのほかの材料は100円均一の店でも入手可能なものであるため、今後参加者が家庭などで制作体験をし、クジラや海の生きものへの関心を自主的に高めてゆくことが期待される。

日常的に作品を目にしてもらえるよう、バッグやゲーム機、携帯電話など身の回りのものに付けられるものづくりにすることにより、普段から海が存在を意識し、親近感も増すと考えられる。またクジラ柄のシールをプレゼントし、よりクジラへの興味が喚起されるようにした。

海にまつわる作品をつくるアーティストの作品をPRし、活動する場を提供することによって、今後他所でも体験活動を実施し活躍の場が広がることで、より多くの人々が海に親しみ、学ぶ場が増えてゆくことが期待される。

### 【来館者の声】

- カマイルカでつくりました。バンドウイルカとの違いが説明してもらってわかりました。ゲーム機にすぐ付けます。
- 子どもたちでも簡単に楽しむことができる体験でよかったです。クジラやイルカと言ってもたくさんの種類がいることがわかりました。
- シールをもらえてうれしかったです。お湯で温める粘土はお店でも売っているので、自分の家でも作ってみたいです。

## 【事業全体のまとめ】

- 絵画や立体造形物など可視的に楽しみやすい資料や、身体の部位、玩具、漁具など触りながら学ぶことができる資料を多数展示することによって、クジラの生態や人の暮らしとの密接な関わり、またクジラが住む海の環境などについても興味を持つ入口となる事業になった。
  - 漁獲したクジラを慰霊する祭礼や石碑、皮や骨、心臓に至るまで各部位を使った生活用品などを通じ、海に感謝の心を忘れない日本人の信仰や、自然からもたらされた資源を無駄なく残さず利用する慣習について紹介した。これにより人が海洋資源を継続的に利用してゆくためにも、海の環境を守り、自然と共生してゆくことの重要性を認識してもらうことができた。
  - 幅広い年代・地域にわたって制作されてきた浮世絵、日本画、洋画、グラフィックデザイン、立体造形作品を一堂に展示することによって、クジラが世界中の人々の関心、憧憬を集めて続けてきたことを伝え、クジラに対して親しみを持ってもらうことができた。
  - 子どもたちでも親しみやすい教科書や絵本、学習ゲーム、玩具などの資料から、クジラが教育の素材としても古くから活躍し、今後も生きものの生態、人の生活習俗との関わり、海の環境など、海の学びを普及し、広める人材を育成する上でも重要な教材となる可能性を示すことができた。
  - クジラの部位や100年以上前の漁具に触る(モリ・火縄銃)、講演を聴く、アート作品を作る、料理を食べるといった多彩な体験のできる付帯事業を通じ、クジラに対する興味を喚起し、人の暮らしとの密接な関わり、クジラの生態的な魅力などについても実感してもらうことができた。
- またそれらは展示全体も含めて多くの研究者・専門機関との連携・協力によって実施が可能になったものであり、今後継続的に海の学びを提供してゆくためのネットワークの構築・強化に繋がるものとなった。
- 離れた三重県と千葉県の間にて巡回展として開催することによって、より広範囲の地域、多数の方々に、クジラ文化に触れ、海の学びの場を提供することができた。

## 3. 主な連携・協力先について

連携・協力先名称	連携・協力の内容
1. 勇魚文庫	展示資料の借用 クジラ塚・供養碑の情報提供 南房総市との連携仲介、助言
2. 鯨と海女の研究室	展示資料の借用 クジラ関連アーティストの紹介 図録・キャプションの英訳 広報協力
3. 一般財団法人日本鯨類研究所	現代の捕鯨・クジラを取り巻く海洋環境に関する情報提供 展示・付帯事業に協力していただける団体（日本捕鯨協会）の紹介 広報協力
4. 日本捕鯨協会	現代の捕鯨・クジラを取り巻く海洋環境に関する情報提供 料理教室における講話
5. 太地町立くじらの博物館	展示資料の借用

	クジラ民芸品作家及びアーティストの紹介、情報提供
6. 鳥羽市教育委員会	市内小中学校への広報協力、小学生の展示観覧呼びかけ
7. 南房総市	クジラの絵画コンテストの入賞作品借用 広報協力
8. 鯨文化交流会	クジラアート愛好者への広報、周知 会長のシンポジウムにおける後援 展示に適した資料・作品に関する情報提供

#### 4. 主な広報結果について

掲載媒体名	見出し、掲載日
1. いせ毎日	「クジラはアートだ！」鳥羽 海の博物館で特別展 (2019年6月27日)
2. 千葉日報	クジラの絵 鳥羽で展示 (2019年7月10日)
3. 読売新聞	特別展「クジラはアートだ！」(2019年7月13日)
4. 交通新聞	鳥羽市立海の博物館 (2019年7月31日)
5. 中日新聞	クジラと人 つながり紹介 (2019年8月11日)
6. 朝日新聞	クジラばかりの展示会 (2019年8月20日)
7. 朝日新聞	美博ノート (2019年8月27日・9月3日・9月10日)
8. 中日新聞	「クジラ」展関連 15日に特別講座 (2019年9月8日)
9. いせ毎日	火縄銃でクジラ捕獲? (2019年9月30日)
10. 東京新聞	アートでクジラ、楽しもう 南房総・白浜海洋美術館 で特別展 (2019年12月4日)
11. 読売新聞	芸術を泳ぐ日本のクジラ (2019年12月5日)
12. 房日新聞	学芸員が展示説明 (2020年1月14日)
13. 産経新聞	日本人が愛したクジラ的美 (2020年1月23日)
14. 『CLIP』	クジラに関するあれこれを一堂に集めた クジラづく しの特別展 クジラはアートだ! (2020年1月1 日)
15. NHK「日曜美術館」	アートシーン (2020年1月12日)

以上